令和２年度

道標

第３１号

秋田県立大館鳳鳴高等学校

目　　次

令和２年度　第１回授業研修会

令和２年度　第２回授業研修会

令和２年度　相互授業参観感想まとめ

初任者研修の報告 …… 理　　科　加 藤 史 弥

初任者研修の報告 …… 地歴公民科　板 垣　　平

実践的指導力習得研修の報告 …… 国 語 科　堤　　薫

教職５年目研修講座（高等学校）の報告 …… 数 学 科　佐々木 大 輔

中堅教諭等資質向上研修の報告 …… 数 学 科　山 口 正 明

編集後記

題 字　畠 山 智 子

令和２年度第１回授業研修会

【テーマ】

「主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり

～探究活動を取り入れて～」

【実施日】

令和　２年　５月１８日（月）

【授業一覧】

校時	時間	教科	科目	授業者	クラス	使用教室
２	9:35～10:25	英　語	コミュニケーション英語Ⅱ	水谷　佳延	２Ｈ	視聴覚室
６	14:05～14:55	国　語	現代文Ｂ	成田　　海	２Ｂ	２Ｂ

【研究協議会】１５：３０～１６：３０

教科	場所
英　語	会議室
国　語	視聴覚室

英語科　「コミュニケーション英語Ⅱ」　学習指導案

実施日時：令和２年５月１８日（月）２校時
場　　所：２年H組（大館鳳鳴）２年Ｆ組（角館）
対　　象：２年理数科（大館鳳鳴）２年特進（角館）
授 業 者：水谷　佳延　Glenn Timony（大館鳳鳴）
　　高橋　輝享　Nina Wine（角館）
教 科 書：自主教材

１　単元名　ディベート（特別授業）

２　単元の目標
⑴ 与えられた論題に対して、賛成もしくは反対の意見を３文程度で書くことができる。【外国語表現の能力】
⑵ 相手が述べた意見を聞いて、要点や詳細を理解することができる。　【外国語理解の能力】
⑶ 相手が述べた意見に対して反駁することができる。　【外国語表現の能力】
⑷ ディベートを聞いて、要旨をまとめることができる。【外国語表現の能力】

３ 単元とCAN-DO形式での学習到達目標との関連
⑴ **身近な話題について、賛成・反対の立場をはっきりさせて自分の考えを述べ、相手と意見を交換することができる。【話すこと（やりとり）】**
⑵ **興味･関心のあることについて､自分の意見やその理由を示しながらまとまりのある内容を話すことができる。【話すこと（発表）】**

４ 単元観
即興型英語ディベートでは、一つの論題に対して肯定・否定チームがお互いの意見を反映させながらジャッジを説得　する。生徒の英語習得度、ディベートに必要な力の習得段階によって、個々のスピーチは様々な内容となる。ディベートに直接参加する生徒は、「話すこと（やりとり・発表）」の技能を伸ばす機会に恵まれるが、そうでない生徒たちについては、聞いたことをメモしてまとまることで「書くこと」についての技能を伸ばしたい。

５ 生徒観
本校は男子２５名、女子１２名、合計３７名の理数科クラスである。角館高校は、男子１８名、女子１６名、合計３４名の特別進学クラスである。

６ 単元計画
１時間目：導入　即興型英語ディベートの説明
２時間目：ディベート１
３時間目：ディベート２（本時）

７ 単元の評価規準

A コミュニケーションへの関心・意欲・態度	B　外国語表現の能力	C　外国語理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
互いに協力しながら、質問したり意見を交換したりしている。	事実、意見、理由の表現理解し、使い分けることができる。	事実の記述と、個人的な意見、理由を区別することができる。	

８ 本時の学習

（1） 目標

① 『校長先生は今年の修学旅行は中止にするべきだ』というトピックに対して、根拠となる自分の考えを示して、相手に伝えることができる。

② 即興で相手側の意見に対して反駁できる。

③ 肯定・否定それぞれの立場の意見を聞いて、要旨をまとめることができる。

（2）指導計画

過 程	学習活動	JTE	ALT	評価
導入 (5)	・ルールの確認 ・ディベーターの選出 ・その他の生徒の役割確認	・活動を理解できない生徒がいればサポートする。	・トピックを提示する	A
展開 (41)	自己紹介 (1) ・角館高校の生徒たちと自己紹介を簡単にし合う。	・自己紹介をする	・自己紹介をする	
	・トピックを理解する。(1)	・トピックを確認する。	・トピックを確認する	
	トピック：School principal should decide to call off the school festival this year.			
	・プレパレーション (15) ディベーターたちは、意見をブレストして原稿の準備をする。それぞれ理由を２つ用意し、根拠と具体例を準備する。 他の生徒は自分の意見を 100 語以上書く。	・大きい声で丁寧に話すようにさせる	・伝えたい表現があれば支援する。	A B A
	・ディベート (20) 「肯定１→否定１→肯定２→否定２→否定まとめ→肯定まとめ」の順にスピーチをしていく。 他の生徒は、各ディベーターの意見を聞きながら、主張・理由・具体例を聞き取るメモする。	・タイムキーパー ・コメント	・ジャッジ ・コメント	B C
	・ジャッジと講評 (2*2=4)			
まとめ (4)	・自己評価をする。	・本時の学習ポイントをまとめ、振り返りを行う。 ・ワークシートの提出を指示する。	・生徒の考えにコメントする。	

留意点：

・シートは休み時間のうちに配付を済ませる。
・座席配置を決めておく
・プレパ時に書かせた意見、フローシートそして評価シートは回収し、フィードバックを行う。
・司会進行は、（ 高橋輝享・角館 ）が行い、ジャッジはＡＬＴ２名が行う。引き分けでもよい。
・ジャッジは勝敗を決め、ベストスピーカー２名をそれぞれ選出する。

●教科・科目[　　英　語　　]
授　業　者[水谷　佳延、グレン・ティモニー]　　研究協議会参加人数 ［ ２６人 ］
「研究授業について」

①授業者が重視した点（　a、d　）
ａ．生涯にわたって学び続ける意欲の向上　　ｂ．社会人としての基礎的資質・能力の育成
ｃ．自然体験，社会体験等の充実　　ｄ．発達に応じた指導の継続性
ｅ．家庭・地域と連携した教育

②授業者の感想
水谷：コロナウイルスの影響によりペアワークやグループワークを多用できないからと言って、講義スタイルの授業を５０分間行うことは授業研修会にそぐわないのではないかと考え、オンラインディベートを行うことにした。「話すこと（特にやりとり）」と「書くこと」にどうやって焦点を当てるかに苦慮した。タイの姉妹校は休校中のため、前任校である角館高校に声をかけた。角館高校は英語教育強化地域拠点校であり、ディベートの経験も豊富。彼らとオンラインで議論をすれば、マスクなしで気兼ねなく話すことができるのではないかと考えた。問題点は、ビデオ通話をする３人以外の生徒をどうするかだった。３人と同じトピックで肯定・否定側それぞれに立って意見を書き、ビデオ通話をしている生徒たちの主張を聞いて、評価をさせた。すでにワークシートを提出した生徒たちは、初めてにしてはよくできていた。私もオンラインディベートは初体験で、普段授業をしていない生徒たちとの活動だったが、形にはなったように思う。目標は debater が相手の意見に適切に反駁して audience がちゃんと Link Map を書くことだったが、当然のことながら、どちらも１度や２度練習しただけで身につくものではない。生徒たちにとってハードルの高い活動になってしまったことが反省点だが、生徒たちは楽しそうに参加してくれた。角館高校や湯沢高校とのオンラインディベートを行うのであれば協力したいので、英語科の他の職員もぜひ検討してほしい。
Glenn：I think it went over very well.　The students seemed to enjoy talking a lot.　It was a unique experience for the students and I would love to try this with other classes.　I hope there will be more opportunities for the students to communicate with other schools.

③参観者の感想・意見
長里：オンラインである点が目新しく、これからの時代で必要となる資質が多く含まれていると感じた。英語が得意な生徒の中には、早く、流暢に話せればいいと思っている者もいるが、オンラインで自分の意図を理解してもらうためには、普段以上に「英語で確実に伝えること」を意識しなければならない。これからの英語学習では、相手と直接話す以外の場面も想定すべきだと思うので、生徒たちにとって良い機会になったのではないか。ディベートの時に、ビデオ通話をする３人以外の生徒にもすべきことがあった点が良かった。私が英語で授業をすると指示が多くなってしまう傾向にあるが、今日の水谷先生の授業では何をすべきかを生徒が理解して、安心して授業を受けていた。不慣れなせいもあるだろうが、反駁のときには相手の意見をもっと積極的に追及してほしかった。H組の生徒には、これからもディベートに慣れ親しんでほしい。
三浦：この授業が、少なくとも debater の３人にとっては、スピーキングやディベートに対する強い動機づけになったのではないかと感じた。敗北こそしたものの、初めて会う、ディベート慣れをした生徒と議論をする緊張感や、普段取り組むことのない即興型のディベートは、良い刺激になったのではないか。生きた英語を経験する機会であり、生徒たちはまたディベートをやりたいと思うのではないか。私の授業でも、もっと生徒に英語を話させなければならないと反省している。オンラインということもあり、debater３人に対して audience が多数いたが、これからも debate を経験する機会はあると思うので、積極的に参加してほしい。

水谷：教科担任から授業を３時間分もらい、１時間目はディベートの流れについて日本語で説明してから、生徒たちには日本語でディベートをさせた。２時間目は Glenn 先生が主導して、“School should begin in September.”をトピックに英語でディベートをした。生徒たちは楽しんでいて、かなり盛り上がった。

奈良真：debater はどのようにして決めたのか。

水谷：２時間目の英語でのディベートを見て、３人を候補にしていた。その上で、ビデオ通話でのディベートに志願したい生徒はいないか聞いたところ、ちょうどその３人が挙手してくれた。

奈良真：志願したという点が良い。反駁しにくい内容だったが、内容を繰り返して伝えることができていた。

宇佐美：英語で生徒たちに指示をした後で、指示の内容を日本語で説明させていた点が良かった。英語では十分に理解できない可能性のある生徒へのフォローができていた。

大野：確かにディベートは１年生のときに経験しているが、即興で取り組めていることに驚いた。Link Map での作業時間も含めて、段取りが緻密に計算されていて参考になった。

肥田：生徒たちの生活に密着したテーマである点が良かった。日常的に、生徒たちが英語を使う場面が少なく、実際にネイティブスピーカーに会う機会も少ない。使って身につけなければならないはずの言語が使われていないと感じる授業が多いが、これは理想的な授業だったのではないか。理数科の生徒であれば、普段から数値的根拠に敏感であるべきで、それらをもっと提示してほしかった。audience のいるディベートも良いが、見ているだけの生徒を作らないために、小グループ同士のディベートができれば、なお良かった。母数が多ければ、同じようなレベルの生徒たちで議論をさせやすくなるのではないか。

水谷：PDA 即興型英語ディベートでは、電子辞書は使用できるが、インターネットは使用できないため、数値は出せなくてもいいことになっている。数の「多さ」「少なさ」ではなく、アイディアで勝負してほしかった。回数を重ねていけば、より建設的な意見を短時間で思いつくようになるだろう。

成田美：本県では２年前から、高校教育課主催でディベート大会を行っている。本校も毎年１チームが出場している。秋田南高校や秋田高校などの高校は非常にレベルが高いのだが、ジャッジは具体例の多さに注目していると聞いている。１つの意見に対して、実生活に基づいた例をいかに多く提示して自分たちの主張を強化できるかが評価ポイントの一つになっているようだ。角館高校の生徒たちは、現在の具体例だけではなく、質の高い、将来に関する具体例も出せていた。本校の生徒たちは rebut（反駁）にあまり慣れていない傾向にある。具体例を豊富に出しながら、相手の意見に対して反論できるようになることが課題である。

肥田：ディベートは、他の教科の授業にも導入できるのではないか。

④協議事項

昨年度の授業アンケートによると、『授業で意見交換や学び合う機会（※）が設けられているか？』という問に対する評価は概ね良好でしたが、『（※）のような場面で、積極的に参加・発言しているか？』という問に対する結果はまだ改善の余地があるようでした。

生徒が『対話的で深い学び』に積極的に参加していくようにするためには、どのような工夫をしたら良いと思いますか？

成田美：浅利前教頭はよく「アクティブラーニングが普及するにつれて、話し合いの場面さえ設定していればいいという風潮になってしまっている。今後は話し合いの質やタイミングを考慮して導入しなければならない」と言っていた。どのような場面で意見交換や学び合う機会を設定すべきだろうか。私は、答え合わせのときに必ず話し合い・教え合いの時間を設けている。意見が違う点があれば、リーズニング（根拠を提示しながら、なぜその答えになるのかを説明すること）をさせている。

高田：授業内で単元の確認テストを行った時には、後半の時間を添削に充てている。生徒たちはその時に、自発的に話し合いをしている。自由な議論の場こそ作れているが、深い学びにはなっていな

いように感じる。論理的な説明があって初めて深い理解ができるのであり、生徒たちの話し合いでは理解者は増やせるものの、深い学びには至らないのではないか。

宇佐美：参加・発言は、自分の考えや基本的な知識がなければできない。その前提条件を生徒たちが達成できるように支援をしてから、その次に浮上してくる課題について話し合いをさせたいと思って授業をしている。

桜井：共通プリントには難易度の高い問題から低い問題まで載せているが、難しい問題を一人で解ける生徒はやはり少ない。それを解く際にグループを作り、学び合い・教え合いをさせている。班の中で理解度の高い生徒があまり理解できていない生徒に教える環境作りはしているが、教える生徒・教えられる生徒が固定化してしまう傾向にある。去年の高教研の中で見た、授業プリント以上の問題を用意して、各班で教えてばかりの生徒たちが班を超えて集まり、高め合う環境を作っている授業が印象的だった。

成田美：一部の生徒が教えっぱなしにならないような策が必要。私も授業の中で small teacher を指名して、教えさせることをしてみたことがあったが、上位層への刺激が少ないようにも感じた。

肥田：日本は、間違いやミスが責められすぎる傾向にある。失敗を恐れて、おどおどしている生徒が多い。生物選択者の中には医療問題に興味を持っている生徒が多いので、医療に関係し、自分の知識を使って答えられる問題を設定している。生徒が持っているものと教員からの働きかけが知的興味・関心を刺激する材料になるので、生徒が関心を持ちそうな話題を選び、それを小論文・面接試験対策に繋げていくようにしている。

中嶋隆：ミシガン大学にアクティブラーニング専門のウェブサイトがあり、そこにはアクティブラーニングの条件の１つとして答えのない問題を扱うという項目があった。今日の授業のトピックも、答えのないものになっていた。欧米ではアクティブラーニングのために授業前までに大量の文献を読むことが前提になっており、その後にアクティブラーニングを行い、それが深い学びに繋がっている。日本の状況を考えると、反転授業を前提にしたアクティブラーニングは厳しい。

渡部拓：新学習指導要領では、見方・考え方が重視されている。正解はない前提で、いろいろな考え方を持つように指導しているが、それがどう効果を上げているかは、今のところわからない。普段の授業では、一般化した、できるだけ実生活に関連した質問をするように心がけている。例えば、遣隋使の記録の中には中国側にだけあり、日本側にはないものがある。それを一般化して、「友人と遊んだ時の日記を、友人は書いているが自分は書いていない」といった状況に置き換えて、なぜそのような状況が起こるのかを推測させている。

今畠：公民では、覚えてほしい箇所を話し合いさせている。また大人として、主権者として知っておいてほしいことを話し合いさせている。特別定額給付金はなぜもっと高額ではないのか、また、その給付金の財源はどこなのかという身近な問題提起をして、同じく所得税が改正されたリーマンショック時との比較や、国際返済までの期間の確認、返済を早めるためには消費税を１３％に上げるべきなのかなどの議論を経て、政府がなぜその金額にしたのかまで考えさせようとしている。

大野：授業での意見交換や学び合う機会は、あまり設定していない。無駄に時間を過ごさせずに、教えなければならないことを教えたいという気持ちが強い。普段できることと言えば、資料集に載っていないような疑問をこちらから問いかけて、話し合いをさせている。しかし、話し合いをしたくない生徒もいるので、一人で考えてもいいと声かけをしている。等高線はなぜ省略されるのかなど、私が不思議と思うことを聞くようにしている。大人数での授業になると、恥ずかしがって主張ができない生徒も多いので、試行錯誤を重ねている。

畠山武：保健の授業は、意見交換をしたり学び合ったりする機会を作りやすいが、話す人が固定化していってしまうので、それにどう対処するかが課題となる。そのために、司会を毎回変更することと、全員に発言させることを行っている。毎時間テーマを２～３個用意して、各班に割り当てている。議論の後で、それぞれの班で出た意見を全体で共有している。班での話し合いを活発にできるかどうかは司会の力量次第だと声かけをしているが、メンバーを入れ替えない限り、役割や話す人の固定化はどうしても起こってしまう。人工妊娠中絶を扱った時には、まとめの段階で、それを減少させるにはどうしたらいいかを生徒たちに話し合わせた。

山口智：１年生には、健康をテーマにして話し合いをさせた。なぜ健康でなければならないのか、そして、健康でなければどうなるのか。繰り返し問いかけて、身近な例も踏まえて考えさせていくと、普段話さない生徒も考えるようになる。そのような環境作りを心がけている。

田畑：話すことに大きなプレッシャーを感じる生徒もいるのではないか。一番聞きたいことは後半に設定して、それまでに話しやすい環境作りをすることを心がけている。答えの決まっている質問を周囲で確認させることから始めて、最後にはウエイトの大きい問題を提起するようにしている。どんな問題を設定するかよりも、どれほど話しやすい空間を作るかが重要ではないか。クラスメイトのその日の様子など、いろいろな要素が絡み合って対話はしづらくなっていると思うので、その緩和を意識している。

日景：自分の考えをいきなり全体に発表することはできない。じゃんけんをして、負けた方が自分の意見を言うなどといった、簡単なことから対話を導入している。受験対策とどう並行するかが課題だと感じている。スモールステップで問題を設定して、時間をかけながら、話し合いの中で自然と知識を習得できるようにしたいが、常にそうしている訳にもいかないので、自力で定理を作ってほしい場面などに限定している。

佐々木大：数学に関しては、答えのない問題は基本的にない。過去に研究授業を行った時には、教科書の例題に対して４つの解法を用意して、生徒たちに５点満点で採点をさせ、その点数をつけた理由を話し合わせた。答えがある問題であっても、見方を変えれば答えのない問題にできるのではないか。

木村裕：数学は、他教科に比べると、覚えるべきことが大分少ないように思う。ある程度知識を身につけてしまうと、解法の方針や手順には違いが出てくるので、別解を考えさせることにも取り組ませている。話し合いをしていると、活躍する生徒や話す生徒が固定化しがちだが、今日の授業では、debater はもちろんのこと、聞いていた生徒もディベートを「体験」していたのだと思う。どの生徒にとっても実りのある時間になったのではないか。

成田美：各教科、各教員によってアプローチの仕方は異なるが、生徒たちの考え・理解を深めることには継続して取り組まなければならない。この協議の中に多くのヒントがあったように思う。これからの授業に生かしていきたい。

大館鳳鳴高等学校　国語科「現代文Ｂ」学習指導案

日　　時　：令和２年５月18日(月) ６校時
対象生徒　：普通科２年Ｂ組(36名)
使用教科書：三省堂 現代文Ｂ 改訂版
授 業 者　：臨時講師　成田　海
場　　所　：２年Ｂ組教室

１　国語科２年生で目指す生徒像
①興味関心を持つ事項について読書・調査によってより深く理解し、発表・発言できる生徒。
②論理的・文学的現代文に親しみ、理解の道筋を捉えることができる生徒。
③徹底して語彙力の獲得に邁進する生徒。
④古典の背景に興味を持ち、文法句法の知識を身に着けた生徒。

２　単元名　小説　『山月記』（中島敦）

３　単元の指導目標
・小説細部の表現に注目し、その意味を小説全体の解釈につなげる。
・小説の構造に留意し、李徴が物語る行為の持つ意味を捉える。

４　生徒の実態
２年Ｂ組は男子12名、女子24名の計36名で構成されているクラスである。男女関係なく、授業において疑問点が浮かんだら積極的に発言する生徒が一定数いる。しかしその一定数の疑問を出す生徒ばかりが発言する傾向もあり、他の生徒は出てきた疑問だけに対して考えるという態度が感じられる。
本単元では『山月記』を扱う。『山月記』は「現代文」の小説の最初の教材で学ぶ。漢文訓読調で一見とっつきにくいが、内容の面白さもあり生徒の心を惹きつける教材である。ここでは話の表面的な面白さだけでなく、物語を中国盛唐の時代に設定したこと、そこからわかる当時の科挙の試験内容や官僚の特徴などから作者の意図を考えたうえで李徴という主人公の人物像を捉え、その告白の読解を通して、人間の葛藤や誰もが持つ「獣」の部分を理解させ、生徒自身の生き方を振り返らせ、またこの先を考えさせる読み方を目標としていきたい。

５　単元の指導計画（7時間）
(1) 指導計画
１　本文を段落分けし、第１段落から李徴の人物像をとらえる。・・・・・・・・・・・・・・・・2時間(本時2/2)
２　第２段落から李徴と袁慘の関係、袁慘の人物像をとらえる。・・・・・・・・・・・・・・ １時間
３　第３段落から李徴が虎になった経緯や彼の人と虎の間で苦しむ葛藤をとらえる。・・・・・1時間
４　第４段落から李徴の詩文への執着の強さ、提示される漢詩に込められた思いをとらえる。・1時間
５　第５段落から李徴の言った自尊心や羞恥心の意味、彼の抱いている悲しみをとらえる。・・1時間
６　第６段落から李徴の変化、彼が物語った行為の意味をとらえる。・・・・・・・・・・・・・1時間

(2) 評価規準

(ア)関心・意欲・態度	(イ)読む能力	(ウ)知識・理解
漢文調、盛唐の時代の話という文章の特徴や表現上の特色に注目することで内容の深い理解を目指そうとしている。	人物の心情の推移を把握しながら文章を読み取っている。	漢語的な表現や語句の意味、内容についての理解を深めている。

6　本時の計画

(1) 題材名　小説『山月記』

(2) 本時の目標 李徴の人物像を捉える。

(3) 本時（単元）で重視する点（　a　）

a 生涯にわたって学び続ける意欲の向上　　b 社会人としての基礎的資質・能力の育成

c 自然体験、社会体験等の充実　　d 発達に応じた指導の継続性

e 家庭・地域と連携した教育

(4) 学習過程

過程	学　習　活　動	教 師 の 支 援 等	評価の観点
導入 (10分)	前時の学習を振り返る。 科挙の流れ、内容、当時必要だった理由を確認する。 本時の目標：李徴の人物像を捉える。		
展開 (30分)	「儒教」が科挙の試験科目に含まれている理由を考える。	前時学んだ儒教の内容に注目させる。	語句の内容についての理解を深めている。
	本文中から、この時代の官僚が「俗悪」であることを確認し、なぜ李徴は俗悪な上司に何も言わないのか考える。	・「俗悪」を辞書で調べさせ具体的なイメージを考えさせる。 ・儒教に注目させる。	・語句の意味を理解している。 ・「俗悪」は許せないが同時に儒教に縛られている李徴の心情を把握できている。
	なぜ李徴は官僚をやめた後、詩人になったのか考える。	時代やそもそも官僚を辞めた理由に注目させる。	李徴の心情の推移を把握している。
	詩人になった後の李徴の人生を確認する。	売れずに再就職した李徴の絶望、それでもまだプライドを捨てられていないことを本文から確認させる。	
まとめ (10分)	李徴の人物像について考える。	前時、本時の内容をまとめて考えさせる。	学んだことをもとに李徴の人物像を捉えられている。

●教科・科目[　現代文Ｂ　　]

授　業　者[　成田　海　　]　　研究協議会参加人数　[　２３人]

「研究授業について」

①授業者が重視した点（　　a　　）

ａ．生涯にわたって学び続ける意欲の向上　　ｂ．社会人としての基礎的資質・能力の育成
ｃ．自然体験，社会体験等の充実　　ｄ．発達に応じた指導の継続性
ｅ．家庭・地域と連携した教育

②授業者の感想

朝からとても緊張していた。授業で扱う教科書本文のコピーも準備していなくて申し訳ない。

授業は概ね上手くいった。今回の研究授業では、学習のプロセスをいつもと変えてみることを意識した。「李徴の人物像をとらえる」ということを目標とし、ここにたどりつくために歴史的背景などを重視してみた。初回の読みでは「ナルシスト」というネガティブ・否定的な見方が多かった。それが、歴史的な背景や儒教について教えることで、多面的な見方ができるのではないかと思った。

③参観者の感想・意見

（質問）

Q：今回の授業では、生徒全員が教師の指示を一度で理解し、無駄な時間が無く、すぐに指示された活動にうつることができていたが、生徒に対して授業を受けるときのルールなどをきっちりとオリエンテーションしていたのか？（板垣）

→A：自分では特に授業の受け方をオリエンテーションしたことはない。昨年度教科担当していた先生方の指導のおかげだと思う。（成田海）

Q：前時（この単元の１時間目）は、どのような授業を行ったのか？（佐藤大）

→A：まず第一段を読ませた。その時、漢字の読み方や語句の意味を辞書で調べさせ、自分なりに言い換えてみるという活動をした。その後、科挙や儒教について説明した。（成田海）

Q：作品全文は読んでいないのか？（浅野）

→A：予習で全文読んでくるように指示している。授業の中では全文は読んでいない。（成田海）

Q：今回は二人組でのペアワークのみで、グループワークは行わなかったが、本来はグループワークも予定していたのか？

→A：グループワークも行いたかったが、コロナの影響もあり、今回は我慢した。（成田海）

（感想・意見）

・生徒が優秀だなと思った。教師の少ない説明で、これからやるべきことを本当によく理解していると思って見ていた。教師と生徒とのやり取りが対話的になっていてよかった。（小笠原與）

・難しい文章で、自分で読んだだけでは分からないところが多い文章だった。自分の授業では生徒が発表する際、特定の生徒だけが手を挙げて発表してしまうが、今回の授業では最後先生の方から指名したとき、しっかりと発表していてみんなよく考えているなと思った。（田村）

・生徒の発言に沿って板書が進んでいっていた。この点は自分も見習いたいと思った。挙手制だけで発表させると弊害もあるので、どちらも一長一短だが、機械的に生徒を指名したほうがいいかもしれないと思った。（板垣）

・最後の発問に関して、今回は一人だけしか発表させなかったが、もっと多くの生徒から意見が

聞ければ、さらに良かったと思った。（小野大）

・教科が違うとこんなにも生徒の表情が違うんだと感じた。生徒たちが授業を好きだということがよく感じられた授業であった。他の先生が指摘していたが、自分は挙手制でも悪くなかったと思った。（渡部洋）

・前時の復習を最初に板書していたのが良かった。授業のつながりの大切さを改めて感じた。もともと自分で準備していた内容だけではなく、生徒の発言を取り入れて板書していたのが良かった。（富樫）

・生徒の声を丁寧に取り入れて板書していたため、生徒も安心して授業に参加することができていたと思った。（佐藤健）

・社会科としても、とても勉強になる授業だった。８世紀中ごろの中国というと楊貴妃の楊一族の専横の時代だったため、出世すべき人が出世できない時代だったのかなと社会科として感じた。（成田康）

・生徒の発言を否定するのではなく、しっかりと受け止め、授業に取り入れていたのが印象的だった。（児玉）

・音楽の時間も、「時代背景を理解して鑑賞すると、また印象が変わったりするんだよ」と指導したりするが、歴史を説明する難しさを感じている。（成田洋）

・歯切れのいい発問に、生徒たちも自分で考えて発表していてすごいと思った。
　今回の授業では「俗悪」という言葉に注目したが、この一文だけでこの時代の役人が「俗悪」と決めてしまっていいのか。この一文はただの李徴の主観なのではないか。もっと別の所に注目すべきだったのではないか。（佐藤浩）

・他の先生も言っていたとおり、挙手→発表、ノート→ペアワーク→発表という定型が確立されていて、それが生徒にも浸透していたのがよかった。生徒たちが前時の授業内容を理解・消化し、本時の授業に生かしていたのがすごいと思った。
　自分は２Ｂの生徒では世界史選択者にしか授業をしていないが、２Ｂ全員だとこのような雰囲気なのだなと思った。（三森）

・生徒の発言を丁寧に拾っているのが印象的だった。一つの発問が、その次、その次の次の活動につながっていたのが良かった。理科でも歴史的背景を踏まえた授業というのが考えられるので、参考にさせていただきたい。（加藤）

・素晴らしい授業だった。生徒たちが楽しそうでよかった。（小笠原秀）

・自分が生徒の時はなんとなく授業を受けていたが、今回の研究授業は自分で考えることがたくさんある授業だと思った。（小林佑）

・高校時代、自分は６時間目の現代文の授業では寝てしまっていたが、今日の授業は生徒がみんな集中して楽しそうに受けていたのが印象的だった。（小林匡）

・生徒に考えさせる時、前回の授業の内容を踏まえて考えるよう指導する声かけが良かった。（宮腰）

・科挙に踏み込んでいくことで、こんなに深い授業ができるのかと感じた。生徒の発言を先生の言葉でまとめ直していたのが良かった。（虻川）

・去年一緒に二年部を担当したが、去年とは授業が全然違うなと感じた。世界史の知識が大事だなと思った。李徴の発狂までの流れをもう少し丁寧に押さえていくとよかったかなと思った。(畠山智)

・授業の形式・展開としてはオーソドックスな授業だったが、教科横断的でレベルの高い授業だった。先生の指示がすごく明確でよかった。授業のテンポが良く、生徒の発言の拾い方がうまかった。
　李徴が発狂するまでの過程をもっと丁寧にまとめるとよかったのではないか。
　本文の記述に沿った読解が大事ではないか。李徴が「何も言わなかった」という記述はどこにもないため、「いくばくもなく官を退いたのはなぜか」といった発問の方がよかったのではないかと思う。(佐藤大)

・「儒教が科挙の試験科目に含まれていた」という表現は適切ではないかもしれないので、気を付けなければならないと思う。教師が科挙や儒教について説明する際は何か基づく資料があったほうがいいと思う。生徒に歴史的背景を考えさせる際も、基づく資料がないとイメージの中の「儒教」だけをもとに議論してしまうため、実りある活動にならないかもしれない。『漢文必携』や国語便覧などにも使える資料が載っているので、それらの資料を授業で利用するとさらによい授業になると思う。(堤)

・時代背景の理解なしに生徒たちに作品を読ませると、自分自身に引き付けて作品を読んでしまうことが多い。そのため、時代背景等が知識として頭に入っていなければならないのは確かなのだが、時代背景などの本文の外にあるものは発問の答えにはならないのではないか。そういう意味で今回の授業では、「儒教」というのを強調しすぎていたのではないかと感じた。(下田)

・生徒たちに一体感があってよかった。若いっていいなと思った。今回の授業の指導案を見たが、いらないところはバッサリ切っている潔い指導案だと感じた。
　メモ→ペアワーク→発表というだけだと少し単調な授業になるかなと思った。
　世界史の授業ではないので、やはりもっと「言葉」に注目しなければいけないのではないか。「李徴はなぜ何も言わずに官を退いたのか」と言っていたが、私個人としては李徴は何か発言したのではないかと思う。
「李徴は人格者だろうか」といった問いがあっても面白かったのではないかと思う。

・「詩人として売れなかったということは、自分を否定されたということだよね」というのは、さらっとまとめるのではなく、もっと生徒に考えさせたほうがよかったのではないかと感じた。(浅野)

令和２年度第２回授業研修会

【テーマ】

「主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり

～探究活動を取り入れて～」

【実施日】

令和　２年　１１月９日（月）６校時

【授業一覧】

教科	科目	授業者	クラス	使用教室
数　　学	数 学 Ⅲ	山　口　正　明	２Ｃ	２Ｃ教室
理　　科	化学基礎	加　藤　史　弥	１Ｇ	化学実験室
地　　歴	地 理 Ｂ	板　垣　　平	３Ｈ	学習室
保健体育	体　　育	児　玉　弘　幸 小　野　大　輔 山　口　智　哉	１ＡＢ	第１体育館 第２体育館 武道場

【研究協議会】１５：３０～１６：２０

教科	場所
数　　学	数学教室
理　　科	物理実験室
地　　歴	図書資料室
保健体育	講義室２―２

大館鳳鳴高等学校　数学科「数学Ⅲ」学習指導案

日　　時 ：令和２年 11 月９日(月) ６校時
対象生徒 ：普通科２年Ｃ組(３９名)
使用教科書：改訂版 新編数学Ⅲ(数研出版)
授 業 者 ：教諭　山口　正明
場　　所 ：２年Ｃ組教室

１　数学科で目指す生徒像

基礎基本を確実に定着させ、大学入試問題などの高いレベルの問題にもそれらを正確に活用・表現することを通じて、課題の解決に際し数学的論拠に基づいて思考・判断し、自らの考えを表現・検証できる能力を育てる。

２　単元名　第４章　極限　第２節　関数の極限

３　単元の指導目標

・具体的に少数回で決着のつく場合を考察することで、規則性に気付かせる。
・場合分けの必要性を理解させ、どのような式になるか考えさせる。
・確率と無限等比級数の関連性に気付かせる。
・無限等比級数の収束条件を用いて確率の極限を求められるようにする。

４　生徒の実態

男子２０名、女子１９名、合計３９名

数学に対して興味・関心が高く、高い学習意欲を持って授業に臨んでいる生徒が多く、教師の発問に対して、考え、発言しようとする姿がよく見られる。少人数集団での活動の場では、教え合いや学び合いを活発に行うことができる。

５　単元の指導計画（１８時間）

(1) 指導計画

１　数列の極限・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７時間
２　関数の極限・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９時間
３　問題演習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２時間（本時２／２）

(2) 評価規準

(ア)関心・意欲・態度	(イ) 数学的な見方や考え方	(ウ) 数学的な技能	(エ)知識・理解
無限等比級数に関心をもち、問題解決に意欲的に取り組もうとする。	無限等比級数の極限を理解することにより、考察に活用することができる。	無限等比級数の収束条件を理解し、的確に処理することができる。	無限等比級数について理解し、和を求められる。

６　本時の計画

(1) 題材名　確率の極限

(2) 本時の目標　無限等比級数を利用して確率を求めることができる。

(3) 本時（単元）で重視する点（　a　）

a 生涯にわたって学び続ける意欲の向上　　b 社会人としての基礎的資質・能力の育成

c 自然体験、社会体験等の充実　　d 発達に応じた指導の継続性

e 家庭・地域と連携した教育

(4) 学習過程

過程	学　習　活　動	教 師 の 支 援 等	評価の観点
導入 10分	目標とする問題を確認する 問題　A さんとB さんが複数回試合を行って優勝者を決めるものとする。ただし，いずれの試合においても引き分けはないものとし，1 回の試合でA さんが勝つ確率は $\frac{2}{3}$ であるとする。どちらか一方が 2 連勝するまで試合を繰り返し，2 連勝した方を優勝とする。このとき，A さんが優勝する確率を求めよ。 少数回で決着する場合の確率を求める。 目標を確認する。 本時の目標：無限等比級数を利用して確率を求めることができる。	・生徒から引き出し、板書により共有させる。	
展開 30分	発問：Ａさんが優勝するのはどのような場合に分類できるか まずは各自で取り組む グループで取り組む 発問：Ａさんが優勝する確率を求めるためにどのように立式すればよいか グループで協力して取り組む 状況を見ながら他のグループとも協力する	・少数回で決着する場合と関連付けて考えるよううながす。 ・解決に向けて考えをグループで共有させる。 ・板書により全体で共有させる。 ・無限等比級数に考えがつながるよう生徒に声かけをする。 ・無限等比級数の収束条件を確認させる。 ・解答を板書し、ポイントを整理する。 ・状況に応じて追加問題を解くよう指示する。	(ｱ)意欲的に課題解決に必要な知識を共有し合うことができたか【観察】
まとめ 10分	本時のポイントを各自でまとめる ペアになり、本時のポイントを説明し合う	・ペアの相手に対して説明できているか机間巡視により把握する。	(ｲ)無限等比級数を利用して説明することができたか【授業プリント】

●教科・科目[　　数学　　]
　授　業　者[　　山口　正明　　]　　研究協議会参加人数　[　１０人]
「研究授業について」

①授業者が重視した点（　　a　　）
ａ．生涯にわたって学び続ける意欲の向上　　ｂ．社会人としての基礎的資質・能力の育成
ｃ．自然体験，社会体験等の充実　　ｄ．発達に応じた指導の継続性
ｅ．家庭・地域と連携した教育

②授業者の感想
　確率、数列、極限のつながりがある題材を選んだ。
　できる生徒をピックアップしすぎて、授業の流れを自分が想定しているものに強引に持っていったところはある。
　グループでの学び合いなども含め、生徒のいろいろな考えを生かしたかったが、できる生徒に計算を答えてもらった。
　生徒には無限等比級数をやると予告はしており、予習をしておくように言ってある。
　最後、確率を足すというのを生徒から引き出せたのはよかった。

③参観者の感想・意見
小笠原（與）: 最初のあたりがかなり丁寧で、後半どうなるか？と思った。一般化できない生徒が多く、グループでやるよりも個人でやって、生徒と対話しながらやってもよかったのではと思う。後半は強引なところもあった。本時のポイントを各自でまとめるところも、いろいろなことが書かれていて、どうなのかと思った。

日景：全員が解けるようになるというよりは、答えに至るまでの流れ、対話などが大事な題材だと思う。生徒の中には、確率なのに数列？極限？のような思考を巡らせている人もいて、単元間のつながりが感じられたのではないかと思う。
偶数回、奇数回と場合分けする際に、n 試合で優勝する場合は？と考えさせてもよかったのではないか。

田村:本時のポイントを各自でまとめて共有するというのを、何かの授業で取り入れてみたいが、生徒の中には初歩的なことや本質からずれていることなどが書かれていて、やり方に改善は必要だと思った。また、一般化ができない生徒が多いことに対して、どうしたらよいか考えたい。

石崎 : 一般化は難しかったが、生徒から引き出せていた。できていない生徒へのフォローとして、例えば k に具体的な値を入れてみる、ということなどが考えられる。授業の形として、１回止まって全体に促す、というところを自分もできるようにしたい。

佐々木：題材が魅力的で、生徒にあてて説明させることもよかった。魅力的ではあるが、やはり難しいということもあり、無限等比級数をもっとシンプルにつけるような問題でもよかったのか。

宇佐美：確率、数列、無限級数のつながりが感じられる問題。プリントの構成として、n 試合で優勝する確率を入れればよかったのではないか。また、問題把握にもっと時間を割いてもいいのではないかと思う。例えば、何回で決着がつくのか？という発問をし、そこから最終的に足すというところまで話が進められるのではと思った。また、一般化のところで、n=2k の k と 2k の関係を生徒がどこまで分かっていたのか。2×2 試合目、2×3 試合目などの表現を入れれば、もっと分かってくれた生徒がいたのではないか。

髙田：生徒との対話ができていて、いい雰囲気であり、時間がおしていても、しゃべるスピードが速くなるわけでもなく、分かりやすかった。本時の目標の一部を隠していたが、それが３５分経ったところでもまだ入らなかったのは、どうなのか。題材としては、やはりぶっつけ本番でやるとすると難しいところがある。(2)で 3C1 を使って計算している人が多かったので、それがダメな理由に触れておいた方が、生徒も流れをつかみやすかったのではないか。一般化して n のときを式にさせるが、n ではなく１試合目、２試合目、３試合目、‥‥‥でも無限和にもっていけるのではないか。また、「３試合以内で」、「４試合以内で」などと聞けば、無限級数と気づけるのではないか。

木村（裕）：例えば、×○○などの書き方をすれば、生徒もイメージしやすく、$\frac{2}{3}$と$\frac{1}{3}$のセットにも気づきやすいかもしれない。数Ｂの授業を担当しているが、いつもは元気があり、反応もよいが、今日はおとなしかった。グループでの活動をそれほどしていないということもあり、グループでの話し合いにあまり慣れていないこともあるのではないか。グループ同士で競争させるなど負荷をかけるという工夫もできる。

佐藤（浩）：本時の目標の一部を隠すのはよかった。確かに無限等比級数という言葉が入るのは遅かったが、生徒はそうなんだと思えた。(1)～(6)の量は適切だと思う。ただ、いくつかの言葉を早い段階で言っていたので、言うのを後回しにするべきだと思う。場合分けという言葉も割と早く言っていたし、プリントにも(ⅰ)(ⅱ)と記載されていた。(ⅰ)(ⅱ)はなくてもよかったのではないか。後半は、公式を貼っていたが、なかなか計算に移れない生徒がけっこういた。既習事項の定着など、成績下位者をどこまで見てあげないといけないのか。題材は、なぜ確率が無限級数と関係あるのか？ということを実感できるもので、よかった。

大館鳳鳴高等学校　理科「化学基礎」学習指導案

日　　時 ： 令和２年１１月９日　６校時
対 象 生 徒 ： 普通科１年Ｇ組
使用教科書： 高等学校 改訂 化学基礎（第一学習社）
授　業　者 ： 教諭　加藤 史弥
場　　所 ： 化学実験室

1　理科で目指す生徒像

「わかった」「覚えた」で終わらず、常に疑問を持ち自然現象を本質的に理解、説明しようとする生徒

2　単元名　　第Ⅱ章 物質の変化　第１節 物質量と化学反応式

3　単元の指導目標

物質量と化学反応の量的関係について観察、実験などを通して探究し、基本的な概念や法則を理解させるとともに、それらを日常生活や社会と関連付けて考察できるようにする。

4　生徒の実態

男子１４名、１６名のクラスである。真剣に授業に取り組むことができ、内容をしっかりと理解しようとする姿勢が全体的に多く見られる。仲間どうしで話し合いや教え合いをすることもあり雰囲気が良いが、自分の考えを自信をもって表現できるのは一部の生徒にとどまる。そのため、対話の中で考えを深めさせ、自分の言葉で表現したりまとめたりする経験を積ませたい。また、学力差が大きく、特に計算を含む内容に苦手意識をもつ生徒が存在するため、机間指導や生徒どうしの対話、まとめの時間の確保により確実に要点を理解できるよう配慮したい。

5　単元の指導計画（１７時間）

(1) 指導計画

1　原子量・分子量と式量 ・・・・　2 時間
2　物質量 ・・・・・・・・・・・・ 4.5 時間
3　溶解と濃度 ・・・・・・・・・・ 1.5 時間
4　化学変化と化学反応式 ・・・・　2 時間
5　化学反応の量的関係 ・・・・・　6 時間（本時６／６）
6　化学変化における諸法則 ・・・　1 時間

(2) 評価規準

(ア) 関心・意欲・態度	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 実験・観察の技能	(エ) 知識・理解
物質量を用いた考え方や様々な化学反応とその量的関係について興味を持ち、意欲的に探究しようとする。	物質量や化学反応の量的関係について学んだことを生かし、未知の値の求め方などについて判断し表現できる。	化学反応の量的関係についての観察・実験を通して、実験操作の方法を習得し、結果を正しく記録できる。	物質量の扱いや濃度、化学反応式、化学反応の量的関係などについて理解し、様々な計算問題に応用できる。

6　前時までの内容

アルミニウムと塩酸の反応の化学反応式から何がわかるかを復習し、質量未知のアルミ箔の質量を求める実験計画を立てるところまでを行った。その際、直感で決めたアルミニウムの質量から発生する水素の体積を求めさせ、計算方法のイメージを持たせている。また、実験計画は図を用いて表現させ、それを見ながら実験を進められるようにした。

7　本時の計画

(1) ねらい

これまで学んだことを生かし、実験結果から求めたい数値を計算できるようにする。また、気体の体積と温度の関係にも目を向けさせ、２年生以降の学習につなげる。

(2) 本時で取り入れた視点

主体的に活動できるよう、自分達で立案した実験計画を実行させる。

(3) 本時の学習過程

過程	学　習　活　動	教 師 の 支 援 等	評価の観点
導入 (5分)	・前時までの流れと本時の流れを確認する。 ・学習課題を確認する。	・本時では実験→結果の処理→考察→まとめの流れで進めることを伝え、見通しをもたせる。	
	学習課題：はかりを使わずに、正確にアルミニウム箔の質量を求める方法を考察する。		
展開 (40分)	・実験計画をもとに実験をする。 ・結果の処理をする。 ・アルミ箔の実際の質量と求めた質量が異なる理由を考察する。	・実験操作のプリント(別紙)を配付し、方法や注意点を説明する。 ・正しい実験操作ができているか、注意点が守られているかなどを机間指導で確認し助言する。 ・仮説を確認し、発生した水素の体積からアルミ箔の質量が求められることに気づかせる。 ・各班の求めた値を黒板に書かせ全体で共有する。 ・正しい質量を伝え、自分達の求めた値と比較させる。 ・資料(別紙)を配付し、気体1molの体積は室温では22.4Lでないことに気づかせ、考察させた後再計算させる。	(ウ)実験操作、記録を正しい方法で行うことができたか。【観察】 (イ)自分なりの表現で考察することができたか。【ワークシート】
まとめ (5分)	・本時で理解したことをまとめ、取り組みの自己評価をする。	・考察した内容は、今後必要となってくる考え方であることを説明する。 ・積極的に対話し答えを探究しようとする姿勢が大切であることを伝える。	

●教科・科目[理科・化学]

授　業　者[　加藤　史弥　]　　研究協議会参加人数　[　１８人　]

「研究授業について」

①授業者が重視した点（　a　）

ａ．生涯にわたって学び続ける意欲の向上　　ｂ．社会人としての基礎的資質・能力の育成
ｃ．自然体験，社会体験等の充実　　ｄ．発達に応じた指導の継続性
ｅ．家庭・地域と連携した教育

②授業者の感想

探求的な考え方をして欲しいと考えて行った授業である。現在行っている物質量、化学反応式の授業では苦手意識を持っている生徒が多々見られる状況である。しかし演習を積ませていくうちに、少しずつ慣れてきたため、それを使って考えさせたかった。教科書の中で果たしてどのように探究の課程を意識していくのか悩み、本校で行われていた授業例からヒントを得て、自分なりに改良して授業を行った。アルミ箔の質量を「正確に」という部分に突っかかっていくことで、より深い考察が得られると考えた。発展的な内容のため、今後のペーパーテストで混乱させないように気を付けて授業を行っていきたい。

③ 参観者の感想・意見

・生徒は一人ひとり集中して取り組んでいた。声掛けも素敵な答えがあったから紹介するなど言い方が、生徒を大事にしている雰囲気が伝わってきた。ただ公式に当てはめて計算するだけではなく、「考える」部分もしっかり出来ていた。
・生徒の書いた実験の図をそのままスライドに映して使い、自分たちの実験だと思わせることが出来ていた。実験には必ず誤差があり、それは何故かと考えさせるのが面白かった。２年生になったら、という表現は諸刃の剣で、ニュアンスで生徒の受け取り方が違ってくる。今日やった技術を使えばこういうことが出来るなど紹介すればより興味を持つ生徒が出て来るのでは。
・生徒の「何故そうなるのか」を引き出していた。常識を疑え、という言葉がかっこよく、まさに探究だと感じた。生徒のプリントをスライドで出していたのは、やる気につながると思った。
・板書がきれいでスライドの使い方が的確だった。計算は電卓の使用を認めても良かったのでは。復習をすれば、自分で立式できる生徒が増えたのではないか。温度と体積のグラフが出て来た時は生徒が面白がって一生懸命やっていたので、探究のねらいが達成されていた。
・生徒が本当に楽しそうに授業に取り組んでいた。生徒たちが、化学が好きで授業を理解して先生の意図を理解し「閃いた」というような嬉しそうな声をあげていたのが印象的だった。今後の理系・理数科での理科の授業への取り組む意欲につながるのでは。
・学習の流れの板書、ワークシートが分かりやすかった。スクリーンを活用が参考になった。ほぼ全部のグループがコミュニケーションを取れていたのが印象的だった。結果を考えるところで差が出ていたので、時間制限を設けても良かったのでは。
・学習の流れが前回の授業を含めて書かれていて、一連の流れで分かりやすかった。早く終わっていた班があったので、プリントの裏に問題を載せるなど、その時間何か出来ることがあれば良かった。発問が良かった。目的を変えて繰り返すのが良かった。
・塩酸が 6 mol/L だったが、万が一手に付いた時の対策が示されていなかった。アルミニウムと塩酸の反応で、試験管の中に反応残留物があったが疑問を持ち発言する生徒がいなかった。考察で化学の範囲が入っているのは良いが、化学基礎の範囲で、メニスカスや水面を揃えるということに関して共通認識があったのか。
・探求の課程が意識されていた。普段から、このような理科の基本的な、問題提起、仮説、実験、考察の流れの授業を、理科全体でやっていくことで、探究活動や課題研究につながる。

・アルミの質量の確認を、実験後に同じアルミカップで量って確認させが全部同じではなかった。ここから標準状態ではないことに気づかせて誤差について考察した。今回の授業の本質はそこだったのかと意外な展開に驚かされ面白いと感じた。
・仮説と違う結果から、新たな発見につながっていて良い授業だと思った。ただ先生がヒントを言ってしまっていたが、ヒントを言わなくても気づける生徒がいたのでは。
・生徒一人ひとりに役割があり良かった。実験もスムーズで普段からやられているのだと感じた。
・普段の授業と実験が融合できているところが良かった。自分だと授業は授業、実験は実験と分けてしまうので上手くつないでいて感心した。もう少し時間があればヒントを言わないでやるという方法もあった。かなり遅れていた班があり、自分だったら無視するか、計算をしてあげて教えてしまうが、ぎりぎりまで待ってやらせていたのに感心した。
・プロジェクターの使い方や、黒板の右端に授業の流れを示していたのが参考になった。実験を始める時に教科書類を机の下にしまっていない班があった。メスシリンダーをメニスカスでメモリの 10 分の 1 まで読み取るなど基本的なことはやらなければいけない。だとすれば、透明な水槽を用意した方が良い。大学共通テストにもつながる授業で大変参考になった。
・探究の視点を入れた授業で、準備や計画に時間を掛けていた。計算過程を板書しておき、結果がずれた時に 1 mol＝22.4 L が怪しいと気づかせる、と持ってく方法もある。数値は別として、計算手順が正しいというところを 1 年生ではやはり強調しなければならない。比の計算は中学校の範囲なのであまり時間を掛けることは出来ない。
・実験値のずれは間違いではなく、他に理由があることを考えさせる授業だった。最後に水蒸気圧を引かなければならない事に軽く触れていた。本校ではこのような内容を入れると生徒は楽しがるので、差はあるが、そこに時間を掛けることが出来ればと感じた。発展的内容を積極的に取り入れていくことで深い学びにつながっていき、大学共通テストにもつながる。理系・理数科だけではなく、全体で、化学のスタンダードとして授業に入れて行くことができればなお良いと感じた。参考になった。
・計算過程を板書しておくという意見が出たが、前に学んだ事の復習も授業のねらいに入っていると思うので、それを明示してしまうと出来ない生徒は出来ないままになる。式の意味を板書した方が良かったのでは。計算を諦めている生徒がいた。昔だったら出来ていたことが出来ていない。

④ 協議事項

「生徒が自律的に生きる力と社会参画するための能力を育成すること」が高校でも求められている。このような力を身に着けさせるために、各教科どのように学ぶのか、どのように工夫しているのか。

（英語科）ＩＣＴについて、「生徒に使わせる」ことについて気を付けて授業を行っている。大学生になった時にはすぐにそれを使ってプレゼンテーション等をしなければならない。やらせてみないと、やらないのでチャレンジさせている。使っても使わなくても良いが、これが最低限レベルというのを渡すと、ほとんどの生徒がそれを塗り替えてどんどんチャレンジしていた。社会参画ではないが、つながる種をまくとどんどん芽吹かせてくれるのだと感じた。外部のツールを持ち込むと人それぞれ感じ方は違うが、様々なことにつながる。

（国語）国語とは内容的には社会と結びつくことをやっていると思うので、社会について考えないという事はないが、現実社会と結びつけるという事については遅れているかもしれない。生徒のプリントを使ってプロジェクターに映して指導していく方法は、国語の授業でも出来るのではないかと、今回の研究授業を見て考えていた。

大館鳳鳴高等学校　地理歴史科「地理 B」学習指導案

日　　時 ：令和 2 年 11 月 9 日(月)6 校時
対象生徒 ：理数科 3 年 H 組(36 名)
使用教科書：新詳地理 B（帝国書院）
授 業 者 ：教諭　板垣　平
場　　所 ：学習室（2 階）

１　地理歴史・公民科で目指す生徒像
①歴史的・地理的知識を習得した後、問題意識をもって身の回りの課題に気づくことのできる生徒。
②グループ活動などを通して、他者の意見に耳を傾けつつ、自らの考えを深め課題の解決に向かって取り組める生徒。

２　単元名　大学入試共通テスト対策演習（自然環境）

３　単元の指導目標
（１）世界の自然環境に関心を持ち、協働的な活動に対して意欲的に取り組むことができる。【関心・意欲・態度】
（２）世界の自然環境の分布や特徴に関する傾向を地理的な見方・考え方で捉え、適切な表現で説明することができる。【思考・判断・表現】
（３）世界の自然環境の分布や特徴について、複数の資料を用いて適切に読み取ることができる。【資料活用の技能】
（４）世界の自然環境の分布や特徴について理解を深めることができる。【知識・理解】

４　生徒の実態
3 年 H 組の 36 名（男子 20 名・女子 16 名）の理数科クラスである。半分以上の生徒が難関大学進学を希望しており、地理の学習に対して非常に意欲的な生徒が多い。
一方でマーク模試では、得点率にばらつきがある生徒が多い印象を受ける。その原因として、明確な根拠を持たず不完全な知識で解答する生徒が多いことが考えられる。
本単元ではセンター試験やプレテストの過去問題を教材とするが、「なぜその解答を選んだのか」について他者と議論する活動を通し、「地理的な見方・考え方」や「確かな知識・理解」を身につけさせることで大学入試共通テストの対策を行いたい。

５　単元の指導計画（８時間）
(1) 指導計画
１　大学入試共通テスト対策演習（地形）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３時間（本時 1/3）
２　大学入試共通テスト対策演習（気候）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３時間
３　大学入試共通テスト対策演習（環境問題）・・・・・・・・・・・・・・・・・２時間

(2) 評価規準

(ア)関心・意欲・態度	(イ)思考・判断・表現	(ウ)資料活用の技能	(エ)知識・理解
議論する活動に意欲的に取り組み、解答についてお互いの意見を述べ、自らの考えに活かすことができる。	多面的・多角的な視点を持って他者と議論し、根拠に基づいて論理的に説明することができる。	初見資料について、既習知識を手がかりに適切に読み取ることで自らの解答に生かすことができる。	議論する活動を通して、世界の地形の分布や特徴に関する理解を深めることができる。

６　本時の計画

(1) 題材名　「大学入試共通テスト対策演習（地形）」

(2) 本時の目標

過去問演習を通して、他者に自分の意見を論理的に説明することができる。

(3)本時で重視する評価項目…（イ）思考・判断・表現　（ウ）資料活用の技能

(4) 本時で重視する点…　a , b

a 生涯にわたって学び続ける意欲の向上　　b 社会人としての基礎的資質・能力の育成

c 自然体験、社会体験等の充実　　d 発達に応じた指導の継続性

e 家庭・地域と連携した教育

(5) 学習過程

過程	学　習　活　動	教 師 の 支 援 等	評価の観点
	本時の目標：世界の地形に関する過去問演習を通して、他者に自分の意見を論理的に説明することができる。		
導入 (5分)	1　本時の流れと議論・発表のポイントを確認する。	・パワーポイントを用いて、本時の流れと議論・発表のポイントを明確にさせる。	
展開 (35分)	2　問題演習（15分） センター試験の過去問演習を9問解答する。 3　議論（10分） グループごとに各問題を検証して議論する。共通の解答と解答選定の理由を決める。 4　発表（10分） 各発表者が担当問題の解答と理由について、パワーポイントと板書を活用して発表する。	・制限時間内に解ききることを徹底するよう呼びかける。 ・様子を見て、随時制限時間を調整する。 ・4人1組のグループを作り、「司会係」「メモ係」「板書係」「発表係」を決めさせる。 ・各グループ担当の問題について、お互いの意見を交換し合うように指導する。 ・板書の際は、キーワードのみを記入するように指導する。 ・担当問題の議論が終わり、黒板への記入も終わったグループは他の問題の議論をさせる。 ・発表では、グループ内での議論同様、根拠を明らかにして説明するように指導する。 ・随時補足事項を解説する。 ・解答が間違っていた場合、他グループに意見を促し生徒の活動によって正答を導き出せるよう支援する。	(イ)思考・判断・表現 他者との議論で、世界の地形の分布や特徴を多面的・多角的な視点で論理的に説明することができる。 評価の方法 机間指導による生徒の見取り、ワークシートの回収 (ウ)資料活用の技能 世界の地形に関して、初めて見る資料と既習知識を結びつけ正しい解答を導き出すことができる。 評価の方法 机間指導による生徒の見取り、ワークシートの回収
まとめ (5分)	5　本時の振り返りを行う。	・授業の最後にリフレクションカードを回収する。	

●教科・科目[　地歴公民　]

授　業　者[　板垣　平　]　　研究協議会参加人数　[　９人　]

「研究授業について」

①授業者が重視した点（　a，b　）

ａ．生涯にわたって学び続ける意欲の向上　　ｂ．社会人としての基礎的資質・能力の育成
ｃ．自然体験，社会体験等の充実　　ｄ．発達に応じた指導の継続性
ｅ．家庭・地域と連携した教育

②授業者の感想

共通テストに向けた演習がスタートしているが，教員の解説で理解したつもりになっている生徒がいると気付いた。そこでアウトプットの仕方に重点を置くようにしたため，今回の授業形式には生徒も慣れている。生徒の反応としては，他の人の考え方や解法を知ることができると好評である。内容については，指導主事訪問時の研究授業において，「深い学びとは何か」という命題をいただいた。それに対する１つの解答として，リフレクションカードに「本時の授業で学んだことを，自分の実生活にどのように生かしたいと考えているか」という項目を加えた。

⑤ 参観者の感想・意見

・授業時間が足りなかった。指導案上設定した時間を過ぎても，活動を終わらせなかったことが理由のように思う。切り上げて進めることも必要ではないか。
・どういう過程を経て生徒が問題を解いているか，生徒の思考が明らかになる。
・本時の授業の中に，中学の既習事項が出てきたので，高校へのつながりをより意識していきたい。他にも，振り返りを丁寧に行う，実生活とのつながりの意識等，中学校との共通点も再確認できた。また，一方的な板書スタイルの授業ではなく，話し合いを組み込んで授業されている点も良かった。
・３年生のこの時期は演習が多いため，研究授業が難しいのではないかと感じた。しかし，ＩＣＴの活用の仕方等参考になった。生徒にとってはプレゼンテーションの練習にもつながるとも感じた。今回は１つの問題を１班（１人）に説明させていた。時間の都合かもしれないが，同じ問題を何人かに聞いてみてもいいのではないか。
・説明するスキルが育つと感じた。英語科も演習中心になるため，参考にしたい。発表時間の制限も指示してもいいのではないか。また，長木川ではどうか等，身近な題材を提示する方法も考えられると思った。
・解答を選択した根拠を述べたり，人前に出て自分の意見を伝えたりする練習となり，社会に出てからも役立つスキルを伸ばそうとしていた。地元の地形図を用いる等もできるのではないか。
・問題演習という内容で研究授業をどのように行うのか，大変興味深く参観した。なぜ間違えなのか，ということを考えさせることの意義を再確認した。役割の分担やシェアの仕方も良かった。発表時の態度や姿勢を一層指導してもいいのではないか。
・演習授業であり研究授業であるという点が，新鮮で興味があった。既習事項のアウトプットを確認する授業ということだったが，授業者の論拠ポイントも短く的確であったと感じた。今日何をするか，が「見える化」されている。発表時に気を付ける視点として，教科書や資料集等論拠を明確に示すことを挙げていたが，授業内ではあまり厳密に指摘していなかったように思う。また，１つの問題を複数の班で検討してもいいのではないか。
・生徒の発言を拾い上げて評価するのが上手である。発表時の生徒の声の大きさが気になった。差し棒があれば生徒も説明しやすかったかもしれない。授業者の解説時に，スライドでの資料提示だけでなく，教科書や資料集を開いて確認させることも必要だと思う。また，授業手法と

しては，班編成の仕方や他クラスだと難しいとも感じた。

⑥ 協議事項

当部会では本研修会テーマにある，「深い学び」とは何かについて協議を行った。参加者からは，各人の意見や行っている実践，アイディア等々について闊達な情報提供がなされた。その主なものを以下に列挙する。

・自分事として取り上げることや，問い直しさせること，またそのための場面設定を行うことが深い学びへの向かうのではないか。
・身の回りと絡めて学習に落とし込むことに注力している。例えば，「ベルリン崩壊」から国家とは何か考察させたり，アメリカ大統領選等時事問題から展開したりということが可能である。
・学んだことを実生活に生かすという視点は大切にしたい。
・自教科でいうと，英語の長文読解では，英語の知識・能力だけでは限界がある。英文で扱われている内容や背景について理解するためには，他教科との連携が必須である。
・深い学びの実践という点で，話し合ったり議論したりという活動の重視が謳われるが，稚拙な英語力では「議論」が難しい。英語活用のスキル次第という面もあるように感じている。
・他教科との連携という意味では，地理は地学や生物との相性も良いと思うので，考えたい。
・中学校の言語活動では，生徒の話形に力を入れている。
・生徒の様子を見ていると，１年生と３年生では考える力自体に違いを感じる。学習や体験を通じて，思考力やその材料となる知識の蓄積があるからではないだろうか。また，外国語だけでなく，日本語でもどのような言葉を知っているか，用いることができるかという点も注視していく必要があるだろう。
・議論や話し合い活動も大切だが，そのためにも知識量は絶対に必要。どちらも担保しつつ，限られた授業時間で進めていくことが難しい。ただ，生徒が授業や学習内容に食い付いてくれると活動は進むとも感じる。その能動的な活動が，生徒のできた感，やった感につながり，更に学習内容の定着にも結び付いていくのではないか。今後も自身の授業において考えていきたい。
・本時の後もこのような形式の演習授業を継続するかについては，受験指導という点で決めかねている。しかし，「演習は１人でもできるが，こういう活動はこの時間でないと出来ない」という生徒の言葉を聞き，やりがいと続ける意義も感じている。

大館鳳鳴高等学校　保健体育科「体育」学習指導案

日　　時：令和２年１１月９日（月）６校時
対象生徒：１年Ａ・Ｂ組　６１名
授 業 者：教　諭　　児　玉　弘　幸
　　教　諭　　小　野　大　輔
　　講師（臨時）　山　口　智　哉
場　　所：第１体育館　第２体育館　武道場

１　保健体育科の本年度の目標

心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的、計画的な実践を通して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる。

２　単元名

球技（ネット型…バレーボール、卓球、バドミントン）

３　単元の指導目標

自分たちの課題（技能面）に気付き、仲間と協調して課題解決のための練習方法を考えて実践し、技能の向上を図ることができるようにする。

４　生徒の実態

バレーボール男子（１８名）、バレーボール女子（１９名）、卓球（１５名）、バドミントン（９名）からの選択授業に取り組んでいる。選択球技Ⅰ期では、今回と違う種目に取り組みながら、ルールを理解し技能面や仲間との協調を高めてきた。今回の選択種目Ⅱ期ではⅠ期を活かしお互いにコミュニケーションをしっかり図りながら、運動に取り組める生徒が多くなってきた。高校卒業後のスポーツライフを見据え、自分たちで行う運動の楽しさや、必要性を感じることができるように指導していきたい。

５　単元の指導計画（全１３時間）

（１）指導計画

１　オリエンテーション・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間
２　課題を設定するための練習・・・・・・・・・・・・・・１時間
３　課題を解決するための練習、種目ごとのゲーム・・・・９時間（本時７／９時間）
４　種目ごとの技能テスト・・・・・・・・・・・・・・・・２時間

（２）評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
主体的に学習に取り組み、健康・安全に留意して、自己の役割や責任を果たそうとしている。	チームや自己の課題を設定し、課題解決の過程を踏まえて、目標と成果を検証し、課題を見直している。	相手の動きを考えながら、空間を作り出すなどの攻防を展開することができる。	技術などの名称や行い方について、学習した具体例を挙げながら、改題解決の方法について、理解したことを言ったり、書き出したりしている。

６　本時の計画

（１）題材名

球技（ネット型…バレーボール、卓球、バドミントン）

（２）本時の目標

バレーボール男子・・・自分の役割に気付いて、その役割を果たしチームに貢献できるようにする。
バレーボール女子・・・ボールコントロールを意識し、ラリーが続くゲームを楽しむことができる。
卓球・・・・・・・・・ボールの回転を使い分けてゲームを展開することができる。
バドミントン・・・・・ハイクリア、ドロップ、ヘアピンをゲームで効果的に打ち分けることができる。

（３）本時（単元）で重視する点

ａ生涯にわたって学び続ける意欲の向上

（４）学習過程

過　程	学　習　活　動	教　師　の　支　援　等	評価の観点
導　入 （８分）	○全体で準備運動を行う。	○大きな動きで行うように声をかけるようにする。	
展　開 (35 分)	○各種目に分かれ、本時の目標と活動内容を確認する。	○ホワイトボード等を使い、授業の流れを示しながら、提示する。	
	バレーボール男子・・自分の役割に気付いて、その役割を果たしチームに貢献できるようにする。 バレーボール女子・・ボールコントロールを意識し、ラリーが続くゲームを楽しむことができる。 卓球・・・・・・・・ボールの回転を使い分けてゲームを展開することができる。 バドミントン・・・・ハイクリア、ドロップ、ヘアピンをゲームで効果的に打ち分けることができる。		
	○練習内容を確認して取り組む。 【バレーボール男子】 パス練習 （直上オーバー、直上アンダー） サーブ、スパイク練習 【バレーボール女子】 パス練習 （オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、移動パス、三角パス） サーブ練習 【卓球】 各種ストロークラリー （フォアドライブ、バックドライブ、ツッツキ） 【バドミントン】 ストローク練習 （ハイクリア、ドロップ、ヘアピン、応用）	○目標を意識できるように、適宜声掛けをする。 ○つまずきがみられる生徒へ課題解決の助言をする。 ○生徒同士の教えあいを引き出すように働きかけをする。	【運動の技能】 評価方法…観察
	○ゲームを行う。 【バレーボール男子】 6 対 6 【バレーボール女子】 6 対 6、時間制ゲーム（3 分） 【卓球】 シングルスゲーム 【バドミントン】 シングルスゲーム	○ゲームに参加していない生徒の役割（審判等）を徹底させる。 ○ゲームの展開の仕方について課題解決の助言をする。	
まとめ (7 分)	○本時の振り返りをする。 ○用具の後片付けを行う。	○本時の目標への達成度を振り返るように助言する。	

●教科・科目[　体育　]

授　業　者[　児玉、小野、山口　]　　研究協議会参加人数　[　１０人　]

「研究授業について」

①授業者が重視した点（　　a　　）

ａ．生涯にわたって学び続ける意欲の向上　　ｂ．社会人としての基礎的資質・能力の育成
ｃ．自然体験，社会体験等の充実　　ｄ．発達に応じた指導の継続性
ｅ．家庭・地域と連携した教育

②授業者の感想

児玉→
　試合ごとに課題を話しあったり、セッターを決めさせたり対話させる機会を設けた。参加する姿勢は良かったが技術面の課題は残る。

小野→
　バドミントン、卓球を２つ展開する中で主体的で対話的な要素を作るためにワークシートを活用しながら試合後に生徒同士で話し合う場面を設定した。第２体育館と武道場を行き来しながらの指導に生徒任せな授業に課題が残る。

山口→
女子 19 人のバレーボールで、技能面が少し劣るクラスだったので、基本的なオーバー・アンダーハンドパスでボールをコントロールし、ラリーを楽しむという所を授業の一番の目標に設定して行った。その目標設定を達成することはできたが、主・対・深の場面をみえる化できるようにするのが今後の課題。

③参観者の感想・意見

堤→
・楽しそうにやっており、全員がなにもやっていない時間はなく運動量がしっかりと確保されていた。

佐藤（大）→
・反省を可視化することで振り返りが出来ていた。
・１年生の技術レベルを見ることができ、３年生のレベルまで引き上げる努力に感心した。
・自分のクラスの研究授業であったが、大きな声が出ており、こんなに声が出せるのかと感心した。

成田（洋）→
・音楽ではみられない姿が見られた。
・評価をどのようにおこなっているのか。

渡部→
・生徒の動く姿勢、生徒が手を抜かない態度など普段の指導が垣間見られた。

畠山→
・セッター以外の人に２回目のパスが回ってきたときの行動などはどうしてあったのか。
　セッター以外の人の行動をどうするか生徒に投げかけてみても良かった。
・女子のバレーボールについては、本当に能力の低い生徒が集まった集団で会ったが、
　先生の指導のお陰で一生懸命やる姿勢が見られ、またよく盛り上がっていた。

・バドミントン、卓球は一人で２種目の担当ということで難しいと思っていたが、評価カードを使って話し合う場面、考えさせる場面が設けられており工夫された授業になっていた。

明石→
・運動する能力が年々低くなっている現状を体育科職員全員で改善方法を持ち寄って授業出来ていることが、女子バレーボールはじめ各種目に生きていた。
水谷→
・クラス全員で一生懸命エアロビをしている姿は圧巻であった。高校生になって全員で同じ事をすることが珍しくなるなか、この取り組みは素晴らしいと感じている。
・声かけの様子は、普段の授業の声かけあっての反応の良さと感じた。
中嶋美紀子→
・楽しそうな雰囲気で、ただやらせるだけでなく声かけが頻繁にあり、練習に対して全員を集合させ何をするべきか確認してから実施するところが良かった。

④協議事項
佐藤（大）→
・体育の評価はどうやっているのか？
技術面は到達度で評価している。その他は観点別で評価している。また伸びしろがある場合も関心意欲態度で評価している。体育の評価は生徒が一生懸命行う生徒ばかりで基本的に高くついている。

畠山→
・「主体的、対話的で深い学びを実現する授業作り～探究活動を入れて～」に対して
下位グループの学びに比べ、上位グループはできてしまうがために目的意識が持ちにくく学びが希薄になって、補助役に回りがちになるということが起きる。上位をどう伸ばしていくのか、が今後の課題になりそう。探究活動において探究意識を生徒から導き出し続けることは限界があり今回の先生方はタイミングの良い声かけ等により、教師が授業内に意図的に課題を振り返る場面や、それを解決する場面を設けることで生徒の学びが深まっていたと思う。

初任者研修の報告

理科　加藤 史弥

１．はじめに

今年度、本校で初めて教諭として勤務させていただき、大変多くの学びを得ることができた。普段の授業や生徒との関わり、先生方からのご指導はもちろんのこと、初任者研修も自分を高める大変貴重な機会となった。ここでは一年間の初任者研修で経験したことや感じたことを振り返っていきたい。

２．研修内容

（１）校内研修

多くの先生方から大変丁寧な指導をしていただいた。研究授業を含む教科研修のほか、一般研修として基礎的素養、マネジメント力、生徒指導力などに関わる多くの研修を受けさせていただき、今後の教員生活において大変重要となる経験をさせていただいた。教科研修では、探究の過程を意識し、主体的・対話的で深い学びが得られるためにどのような授業展開をし働きかけていくかなど、教材研究について考えを深めることができた。普段の授業からこのような姿勢は大切であり、常日頃から生徒に思考を促し、課題を解決する力や意欲を高めていくよう心掛けていきたいと強く感じた。一般研修では、教師としての心構えや多様な生徒との関わり、ホームルーム経営、校務についてなど、多岐に渡る内容について学び、理解を深めることができた。これらのことは、来年度以降クラス担任など、様々な役割を務めさせていただく際に生かしていけるよう意識し、今後も意欲的に学んでいきたい。

（２）校外研修

授業力向上のための研修や、学校組織の一員としての職務への理解、教育相談、生徒指導、キャリア教育、特別支援などといった内容の研修を受けさせていただいた。感染症対策のため距離を保ちながらではあったが、他校の先生方との協議する機会もいただくことができた。生徒の抱える問題についてどう対応するかなど、他校の先生方の考え方を知ることで､自分の考えをさらに深めることにつながった。授業についての研修では、中学校の先生方とも協議することができ、生徒への発問や生徒の考えを引き出す仕掛けなどを学ぶ貴重な機会となった。学んだことを忘れず、今後の授業に生かしていきたい。

↑中学校に勤務されている初任の先生方との模擬授業、協議（9/2）

３．今後に向けて

これまで臨時講師として勤務してきた以上に、多くの経験を積み学ぶことができた一年となった。今後も高校教師として生徒とともに成長し、目の前の生徒たちを少しでも生徒良い方向に導いていけるよう精進していきたい。最後に、総合教育センター指導主事の淀谷先生や本校指導教員の桜井先生をはじめ、お世話になった先生方には厚く御礼申し上げたい。

初任者研修の報告

地理歴史科　板垣　平

１．はじめに

初任者としての今年の一年間は、数え切れないほど多くの学びがあった。この場を借りて、その一部を紹介するとともに私自身の初任者研修を振り返りたいと思う。

２．研修内容

（１）校内研修

校内研修では、多くの先生方の協力のもとで充実した研修を経験することができた。

↑冒険家阿部雅龍氏をオンライン講師として招いた研究授業（6/4）

教科研修では、学習指導案の作成を含めた授業の構成、学習指導要領の理解、本校生徒の実態把握と適切な評価の方法などを学んだ。今年度は合計で 5 回の研究授業を経験したが、新学習指導要領で求められる「主体的・協働的で深い学び」を実現するために様々な手法に挑戦してきた。「生徒の言語活動を確保するための ICT 機器の活用」や、「思考力を刺激するす発問の工夫」「コロナ禍に対応したオンライン授業の提案」などを意識して取り組むことで、多くの反省と手応えを得ることができたと思う。

一般研修では、各分掌主任の先生方からご指導いただいた。各分掌業務における基本的な業務内容から、ベテランの先生方の豊富な教職経験まで、自らの教育観が広がるような貴重な話を聞くことができた。今後の教員人生のヒントになる話ばかりだったので、来年度以降にしっかり生かしていきたい。

（２）校外研修

今年度の校外研修は新型コロナウイルス蔓延の影響により、例年と比べて活動が大きく制限された。研修内容が制限されたことは残念だったが、その中でも多くの学びを得ることができた。

教科指導研修では、同校種の先生方だけでなく、他校種の先生方と交流した研修が心に残っている。付箋を活用したワークショップ形式の協議により、多面的・多角的観点を持つことができた。

教科指導に関する研修だけでなく、生徒指導や特別活動、特別支援教育などに関する研修も充実していた。校外研修で学んだことの全てに共通しているのは、「生徒の実態に応じた指導を心がける」ことである。自分の教育観ありきの指導ではなく、生徒ありきの指導こそが必要であると感じた。

３．今後に向けて

一年間の初任者研修を通して、成長を実感するとともに自らの力量不足を実感する場面も多かった。憧れの教員生活をスタートさせた一方で、ここからが本番であることを再認識できたことが一番の収穫である。

初任者研修の学びを今年限りのものにせず、これから始まる教員生活の確かな土台にしていきたい。そして、生徒ともに学び続ける教師でありたいと思う。

実践的指導力習得研修の報告

国語科　堤　薫

１．研修の目標

教員としての使命感を持ち、豊かな見識を身に付け、主体的に自らの指導力を高める。

２．研修内容と感想

（１）＜講義・演習＞保護者対応と連携

保護者と連携しながら生徒指導をしていく意義について学んだ。保護者と連携していくためには生徒指導上、何も問題が生じていない時に保護者と良い関係を結んでおくことが大切であることを理解した。保護者との信頼関係を築くためには全ての保護者に平等・均等に情報を開示する必要がある。またコミュニケーションの注意点として「客観的事実」だけでなく「心理的事実」にも目を向けること、言い換えるならば言葉を理解するのではなく、言葉を通して相手の気持ちを理解しようとすることが大切であるということを理解した。保護者は学校が指導する対象ではなく、子育てに奮闘している一人の大人であることを忘れず常にリスペクトの気持ちを持ちたいと思う。

（２）＜講義・演習＞学校組織の一員として―学校教育目標とホームルーム経営―

学校組織の一員としてどのように学級を経営していくべきかについて学んだ。学級経営においては、担任個人の個性ももちろん大切だが、学校全体としての教育目標や学年としての教育目標を踏まえたうえで、クラスを運営していくことが大切である。教員個人やクラス全体としての強み・弱みを分析したうえで強みを生かし弱みを成長させていけるような学級経営が望まれる。クラス行事を考える際も、ただ楽しいだけではなくどういった教育目標につながっていくのかという視点が大事であることを学んだ。

（３）＜講義・演習＞「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業構想と実践

社会の変化と要請に応じて求められる力（資質・能力）が変わってきており、当然のことながらそれに応じて授業も変わっていかなければならないということを改めて理解した。実際の指導の場面では、ねらい（身に付けさせたい資質・能力）を明確に設定した上で授業のイメージを形にしていくということが重要であると分かった。授業の構想する段階で、ねらいを達成した生徒の具体的姿を考え、評価規準・評価方法を設定し、「ねらい」→「学習課題」→「評価」の整合性・一貫性を持たせることが大切であることを理解した。また理論的な部分だけではなく、具体的な単元を想定し、実際の授業中における生徒を引きつける工夫やアイディアについてもたくさんの事を教えていただいた。これからの授業にさっそく取り入れてみたいと思った。

３．今後に向けて

今年度の実践的指導力習得研修では、実際に自分が直面し悩んでいた保護者対応、学級経営、教科指導の問題に対して解決のヒントとなるような内容の講義を受けることができた。今年度の研修で学んだことを忘れずに自分なりの方法でこれからの教員生活に生かしていきたいと思う。

教職５年目研修講座（高等学校）の報告

数学科　佐々木　大輔

１．研修の目標

学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導等についての実践的指導力の向上を図る。

２．研修内容と感想

【Ⅰ期】

（１）＜講義・演習＞教育相談と人間関係づくり

教育相談において大切にしなければいけない、「傾聴の姿勢」、「カウンセリングの技法」「人間関係づくり」について、過去の研修内容の確認、演習などを交えながら、実践力を身に付ける内容であった。

（２）＜講義・演習＞学校組織の一員として―マネジメントの視点―

教育目標や重点事項をＨＲ経営にどのように反映させているか、学校全体で共通理解のもとでの教育活動の在り方について確認し、学校組織としてのマネジメントを学んだ。

（３）＜講義・協議・演習＞生徒の実態を踏まえた授業改善①

学習指導要領の改訂をもとに、各校の生徒の実態に即した授業展開と、その課題について協議した。次回研修（Ⅱ期）に向け、授業で実践すべき工夫についても確認した。

【Ⅱ期】

（１）＜講義・演習＞発達障害のある生徒の理解と支援

発達障害のある生徒の理解のためには、まず特別支援教育の現状を把握しておく必要がある。障害の判断や診断の意味にとらわれるのではなく、生徒の行動をしっかりと観察することが重要であり、一人ひとりの教育的ニーズを見極めていかなければならない。

現在、発達障害をもつ生徒を担任している。今回の研修を受け、教室環境のユニバーサル化や合理的配慮など、生徒の学校生活を通してのつまずきを軽減させる方法を検討するよい機会となった。今後の学級経営に役立てていきたい。

（２）＜講義・協議・演習＞生徒の実態を踏まえた授業改善②

Ⅰ期に設定した課題の解決に向けて取り組んだ授業改善の成果と課題を報告した。生徒の思考を深める授業展開について議論し、高校の授業においても数学的活動の楽しさを実感させ、ねらいの達成につながる学び合いの充実を図らなければならないことを確認した。また数学的な見方・考え方を働かせる生徒の姿を明らかにした授業づくりの参考として、中学校の授業実践例を学んだ。入試が変わっていくように、授業も形にとらわれず深い学びを実現できるよう工夫していかなければならない。

３．今後に向けて

教職５年目となり、学習指導はもちろんのこと、学年経営にも積極的に参加し、個々の個性・適性・分掌等に応じた資質能力を向上させていく必要がある。今回の研修を通して学んだ、教育目標の学級・学年経営への反映について、特別な支援を必要とする子どもの多様性の理解と、自立と社会参加を実現するための適切な指導・支援についてはすぐに実践し生かしていきたいと考える。

中堅教諭等資質向上研修の報告

山口　正明

１　はじめに

教員生活１１年目、異動と同時に中堅研の年度を迎えた。菅原勉校長との「本校の教育課題と学校運営について」の研修において、本県の教育課題への対応、マネジメント能力、生徒指導力、教科等指導力で求められるものが段階的に上がっていくなかで、第３ステージ（実践的指導力充実期）という立ち位置に突入し、求められていることのレベルの高さと自身の評価との差を見きわめながら、１年間の研修期間を充実したものにするべく積極的な姿勢で学んでいこうと心に決めた。

２　研修報告

本稿では印象に残っている２つの研修について報告したい。

その１つの選択研修では、地元の製材所で研修させていただき、製材所の現状について学ぶとともに、実際に機械を使った作業を任され、製品作りに関わることができた。経営しているなかで、長い間関わってきたお客さんとのつながりを大事にしていることや、実際にお客さんと顔を合わせて会話することを大切にしている様子がうかがえた。扱う木の種類を限定して経営している製材所もあるなか、多くの種類をそろえながら様々なお客さんのニーズにこたえられるよう準備している点は印象深かった。木材の選別、製品の結束作業、木材の耳取り、雑片の整理等の製品作りを多数任せていただき、触ったことのないような機械に触れることもでき新鮮な気持ちで多くの作業に取り組めた。丸太を切り、様々なサイズの製品を作っていき、最後の雑片の整理を終えた段階で廃棄する木片はほんのわずかしかなく、少しも無駄を作らないような作業工程が確立されていた。安全性には特に留意しており、作業現場の空間はよく整理されており、作業後の片付け作業も徹底されていた。製品の出来高の計算方法は独特なもので慣れるまで時間を要するものだった。お客さんのニーズにこたえながら、存続していくための知恵を出し、前向きに模索している姿は教員生活においても重なる部分が多々あり今後のさまざまな場面で生かされると思った。

２つ目の秋田南高校での授業研修は、初対面の生徒を相手に授業をすることの難しさを感じつつ、良くも悪くも自分自身を顧みる絶好の機会になった。授業後半の進め方がまったくうまくいかず中途半端な授業を受けさせてしまった印象しかないなか、指導主事の先生から話していただいた、「先生方は効率のよい筋道を示してしまいがちだが、学習活動のなかでそれまで学んできたことのなかから何を使えるのかを考えさせ、思考を促す仕掛け作りを考える」「生徒の授業のまとめが、授業者の目指したものと一致すると最高」「経験に頼らず教材研究に時間を割き、生徒がおもわずやりたくなるような教材作り」「準備したものをすべてやろうとすると失敗してしまうため、何をやらせたいのか焦点化して取捨選択をする」といった内容の助言が印象に残り、いま一度「基本技術の定着」「教材研究の充実」「身に付けさせたいことの焦点化」といったことを念頭に授業を作り上げていきたいと感じた。

３　おわりに

この１年間、感染症の影響により多くのことがいつものようにできないなか、研修をとおして貴重な経験をさせていただいた。このあと、形として還元できるよう努めていきたい。指導に関わってくださいました先生方、本当にありがとうございました。

編　集　後　記

今年度も本校研究紀要「道標」第３１号の発行に際し、お忙しいなかご寄稿いただいた先生方に感謝申し上げます。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大が学校の教育環境に大きな影響を及ぼした１年でありました。授業時のマスク着用や、各種研修の中止・延期、オンライン授業導入への準備など先の見通しがつかない中で先生方の負担も大きいものがあったと思います。そのような中でも校内授業研修では、教科の枠を超えて授業参観・協議会を行い、指導方法や学習スタイルなどについて、活発な意見交換がなされたものと思います。令和４年度から年次進行で実施される新学習指導要領では、資質・能力を生徒一人一人にしっかりと育むために、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行い、授業の質を高めていくことが必要とされています。実施まであと１年となりますが、今後の進路指導や学習指導に一層の改善を施すことができるよう研修に励まなければなりません。

また、今年度も初任者研修、教職５年目・教職５年経験者研修、実践的指導力向上研修（８年目）、中堅教諭等資質向上研修と、多くの先生方がそれぞれの研修を積み、その成果を報告してくださいました。

時代の変化とともに、教育に求められるものも変化します。生徒を指導する教育の専門家として、私たち自身が変化を拒み、一つのところにとどまっているわけにはいきません。常に向上する姿勢を失わずにいたいものです。多忙な職場ではありますが、研修や日々の実践を楽しみながら、教師としての力量を高め、活力に満ちた教育活動に今後も励んでいきましょう。

最後に、この冊子が皆様の研修活動に少しでもお役に立てれば幸いです。

研究紀要「道標」第３１号

発行日　　令和３年３月１２日
発行者　　秋田県立大館鳳鳴高等学校
　　秋田県大館市字金坂後６